氏　　名	：	郡司　菜津美
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 264 号
学位授与年月日	：	平成２８年３月１５日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	生徒の現状に合致した性教育の学習環境デザイン
論文審査委員	：	（主査）　教授　有元　典文 （副査）　教授　岩立　京子　　教授　小川　昌文 教授　保坂　亨　　准教授　物部　博文

学 位 論 文 要 旨

「人間として調和のとれた育成」（学習指導要領 第１章「総則」第１「教育課程編成の一般方針」）を目指す上で，学習指導要領には性教育に関する指導内容が体系的に明記されている。しかし，実際の現場教員は性教育について「指導法がわからない」「授業時間が確保できない」といった困難や課題を抱えており（佐光ら，2014），学校での性教育の実質的な充実化が求められている。性教育は特に授業時間数が少ないことからも，他教科よりさらに丁寧に児童生徒への理解と定着を目指す必要がある。そのためには，生徒の置かれている社会・文化的バックグラウンドおよび知識・経験といった，かれらの性に関する現状を的確に捉え，教授事項の理解と定着のための学習環境を作っていく必要がある。本論文はそうした現状を鑑み，生徒の現状に合致した性教育の授業デザインを検討・実施し，探索的に洗練させていくことで，性教育充実への一助となることを目的とした。

筆者はこれまで数年に渡り，高等学校での性に関する集団保健指導の外部講師をつとめてきており，その際生徒の性に関する実態を知ることとなった。そうした実態に合わせ、性教育の実質化をめざすため訪問校の養護教諭と連携し，性に関する実態調査と講演の効果に関する調査を行ってきた。本論文では，こうした高等学校における性教育の実践研究の知見の集積から，生徒の現状に合致した性教育の学習環境デザインのために以下の３点が重要である事を主張した。

１点目の主張は，性別に起因する「性の経験差」を考慮した性教育の学習環境デザインの必要性である。高校２年生を対象に性感染症予防の授業実践を行った結果，同一の授業において男女で理解内容が異なることが明らかになった。これは具体的には，男子の方が「コンドームの使用」が身近な課題であったり，女子の方が「相手を思いやること」が身近な課題であったりといったような性別による学習差である。こうした性別による理解の異なりは，単なる先天的な性別のひきおこす差という訳ではなく，後天的に異なる経験をする（学習する）ことによる文化的な経験に起因する差異であると考えられる。本論文では，性教育を実施する際に，こうした男子または女子としての社会文化的経験の差とそれに起因する理解の差異を考慮にいれた学習環境デザイン

が必要であることを主張した。

2 点目は，生徒の性に関連する「学校風土の文化差」を考慮に入れた性教育の学習環境デザインの必要性である。本論文では，学校風土を，地域・家庭の経済・社会資本などから成立する学校での学習や生活の基盤と定義した。本研究では特に 4 つの高等学校での性教育の実践を比較し，性教育実践の授業デザインを比較・検討した。その結果として，学校風土によって①授業目標，②指導形態，③授業者の役割，④授業教材，⑤生徒主体性の 5 点が異なることが示された。性に関する課題が顕在化していない学校の授業では，生徒がファシリテーターとして授業に参加し，授業目標や教材の選択を生徒自身が主体的に行う実践として観察された。一方で性に関する課題が顕著な高等学校では，養護教諭や外部講師が授業者となり，授業目標や教材の選択を養護教諭が率先して行う実践として観察された。こうした学校風土の文化差による授業デザインを把握することは，生徒の現状に合致した性教育を行う上で重要な基盤となるといえる。また，高等学校における性教育実践は外部講師に依存する割合が高いため（石川ら，2008），生徒の性に関する現状を把握する立場にいる養護教諭と外部講師との連携が，実質的な性教育の実践を行っていく上で必要であるということを主張した。

3 点目は，性教育に特有の自己関与の高さを考慮・活用した授業デザインの必要性である。性教育は他教科と異なり，教科内容と自己の生活との密接な接続に特徴があり，そのことは性教育の授業内で生徒が示す困惑や恥じらいによく現れる。性教育とは，こうした「自己関与性」，つまり教授内容を自分ごととして捉えていること，を考慮し，活用することによって，学習者が自分事として，高い動機をもって学習することが期待できる指導科目であると考えられる。しかし，自分ごととして捉えやすい内容である一方で，「現在恋愛をしていない」というように，性を自己の目下の状況に限定的に捉えている場合，学習内容が自分ごととして捉えられず，その学習効果が低くなる可能性がある。そこで，現在の自己の性のあり方に限定せず，未来の自己とも関連づけて性を学習させる授業を高校 1 年生～3 年生を対象に実施し，その効果を検討した。授業後の調査の結果として，未来の自己を想定する課題に取組むことで，性のリスクに対する予防的な態度や具体的な予防行動への意志が多く回答された。このことから，本論文では，自己の性に関する認識を，現在から未来へと時間的に拡張する授業デザインの必要性を主張した。更に，同調査において，「心配だったら頼れる大人に相談する」といった大人の支援を求めようとする回答や「自分も相手も大切にする」といった交際相手への配慮を意識した回答も見られた。こうした生徒の反応は，自己の性が他者とのつながりによって支えられていることを認識している可能性を示している。本論文では，「現在–未来」の時間的拡張に留まらず，「自己–他者」といった性に関する認識の社会的拡張を考慮した授業デザインの検討も必要であることを主張した。

以上より，本論文では，①性別による文化的経験差，②学校風土の文化差，③自己関与性への配慮および拡張，の 3 点を考慮した性教育の授業実践の必要性を主張した。人間の生・性は，生まれ持った生得的な側面よりも，学習や経験に基づく後天的な側面が大きく，そうした前提に

基づく学校における性教育の実施が，生徒の意識や行動を変え得る学習へと繋がっていくことを示した。生徒の社会的な階層や性別といった一見運命的なことであると捉えられる属性も，生徒自身の自己決定によりかえられることを学習する学習環境のデザインによって，生徒の生・性に関する健康と安全が保証されると考えられる。本論文は，生徒の現状に合致した性教育の授業デザインを集積させることで，現場教員の実践の一助となることを想定し，学校教育がなし得る可能性を示したものである。限られた授業時間数の中で，現場教員が生徒の実態を把握し，効果的な性教育の実施を可能とするような授業デザインの一助となることが期待される。